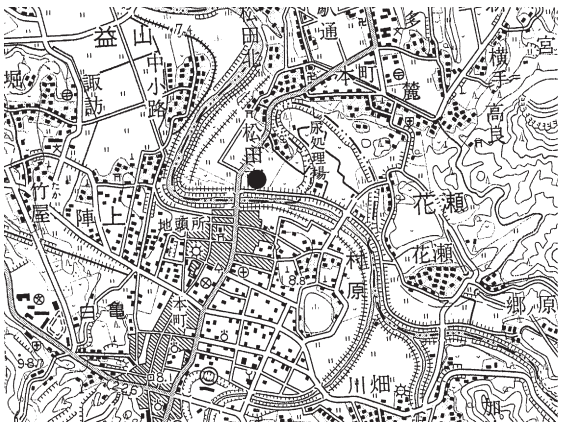
185

芝原（しばはら）遺跡

（日置郡金峰町宮崎字芝原）



第１図　芝原遺跡の位置

位置と環境

遺跡は，万之瀬川の右岸，標高５ｍの自然堤防上に位置する。万之瀬川の流水作用によって堆積した砂質土壌の上に遺跡が広がる。周辺には持躰松遺跡・渡畑遺跡などがあり，県内では調査例が少ない低地遺跡が集中している。

調査の経緯

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴って，県教育委員会が平成10年(1998)確認調査を実施した。平成11年から平成13年にかけて本調査（約18,560㎡）を実施した。

遺構と遺物

３次にわたる発掘調査では，縄文時代中期・後期・晩期，古墳時代，古代，中世，近世の遺構や遺物が多数発見された。

縄文時代中期の遺構には，春日式土器に伴う竪穴住居跡が２軒と土坑が検出された。県内において従来この時期の竪穴住居跡は報告例が少ないので，貴重な資料である。遺物には，春日式土器・阿高式土器・石皿・磨石・石鏃・石斧・黒曜石チップ・フレイク・石匙・スクレイパーなどが出土した。この時期の遺構・遺物が出土するのは，芝原遺跡の中でも一部分に限られており，当時の自然堤防上に遺跡が広がっていたものと推測される。

縄文時代後期･晩期の遺構には，溝状遺構･土坑･集石・ピットなどがある。溝状遺構は，芝原遺跡の北側に広がる微高地から南の万之瀬川に向かって延びており，この中から当該期の遺物が多く出土した。合計５条見つかっている。遺物には，指宿式土器（第２図１～４，第３図11・12）・磨消縄文の影響を受けた擬似縄文（第３図６～10）・市来式土器・鐘崎式土器・南福寺式土器・出水式土器・黒川式土器・石斧・磨石・石皿・石鏃・玦状耳飾（蛇紋岩製）（第３図26）などが出土している。石斧・磨石に比べて，石鏃の出土が少ないことも当遺跡の特色といえよう。

古代の遺構には，掘立柱建物跡９棟（２間×３間）・溝状遺構・ピット・竪穴遺構２基などが検出された。遺物には，土師器・須恵器・刻書土器（「幸」か？）（第３図21)･内朱土器･墨書土器（「貴」か？）（第３図20）・多口瓶（第３図13）・石帯（蛇紋岩製）（第３図27）などが出土している。

中世の遺構には，掘立柱建物跡18棟（２間×３間，この内二面廂を持つものが２棟，四面廂を持つものが２棟）・８棟（１間×２間，この内二面廂を持つもの１棟）・４棟（２間×２間）・１棟（１間×４間）・１棟（２間×４間）・１棟（１間×３間）・１棟（３間×３間，総柱)･１棟（４間×５間），合計35棟を検出した。溝状遺構・土坑・ピット・畠跡・木棺墓３基・土壙墓２基・竈跡20基・方形竪穴建物跡６基・製鉄関連遺構などを発見した。

遺物には，青磁（第３図14・15・17）・白磁・土師器（第３図24・25）・須恵器・天目・鉄滓・鞴の羽口・合子・古銭・備前焼・滑石製石鍋・石鍋の２次加工品・常滑焼・青花（第３図19）・東播系須恵器・カムィヤキ・人骨・瓦器碗（和泉型）（第３図16）・墨書白磁（「大」「十」）（第３図22･23)･朱書青磁（「大」）（第３図18）などが出土している。

中世末から近世にかけては墓域に変わっていった。木棺墓７基・土壙墓が６基見つかっている。埋葬された遺物には肥前陶磁・土師器・古銭（寛永通宝など）などがある。

特徴

本遺跡で特筆すべきものは，縄文時代中期では春日式に伴う竪穴住居跡が２軒検出されたことである。県内でもこの時期の住居跡の報告は数が少なく，貴重な事例となる。

縄文時代後期では，指宿式土器が大量に出土し，完形品なども多いことから，指宿式土器の今後の研究に資するところ多大なるものがあると思われる。また，１点だけ出土した蛇紋岩製の玦状耳飾も県内では出土例が少なく貴重な事例となる。

古代では，溝状遺構の中からほぼ完全な形で出土した多口瓶が特筆される遺物である。この溝は，万之瀬川に向かってコの字状に開いており，川を意識した溝であったことが推測される。この多口瓶は，肩部に口縁が４つ付いており，合計５つの口縁部がある特殊な遺物である。外面や底面には須恵器特有のタタキ痕が認められるが，焼きは非常に甘く，土師器に近い感じがする。本遺跡の東方に位置する中岳の古窯群で焼かれた須恵器と思われる。

この遺物は，京都や奈良の大寺院や役所跡などで出土することが多く，仏教や律令制との関連が注目される。九州では大宰府跡（福岡県太宰府市）・筑後国分寺跡（福岡県久留米市）などで，破片が出土した事例があり，今回のものは３例目の出土となる。平安時代初期の９世紀頃の遺物と捉えられる。

また，中世のピットの中からではあったが，蛇紋岩製の石帯が一点出土した。県内では３例目となる非常に珍しい遺物である。この石帯は，下級の官人が帯に装着する飾りであることから，この遺跡に当時役人が何等かの関わりを持っていたことが明らかとなる。上の多口瓶と関連させて，興味深い問題を提起してくれる遺物といえよう。

中世では，掘立柱建物跡が非常に多く検出されていることが注目される。この建物群は本遺跡の最西端，万之瀬橋に近付くほど密集するという特徴が見られた。隣の渡畑遺跡でも，万之瀬橋のすぐ西側に３間×３間の総柱の掘立柱建物跡が１棟検出されており，万之瀬橋近辺の場の特殊性が遺構の分布状況からも窺い知ることが出来る。近隣の遺跡（持躰松遺跡・渡畑遺跡）で，今のところこれほど建物群が密集したところはなく，今後更にその理由を明らかにしていかなければならない。併せて柱穴内出土の遺物を詳しく検討することによって，建物群の時期的変遷も解明していかなくてはならない。

近世以降，本遺跡も渡畑遺跡と同様に墓域に変わっていってしまうが，人類と河川との関わりの変遷を縄文時代から一貫して追跡することが出来る貴重な遺跡といえる。

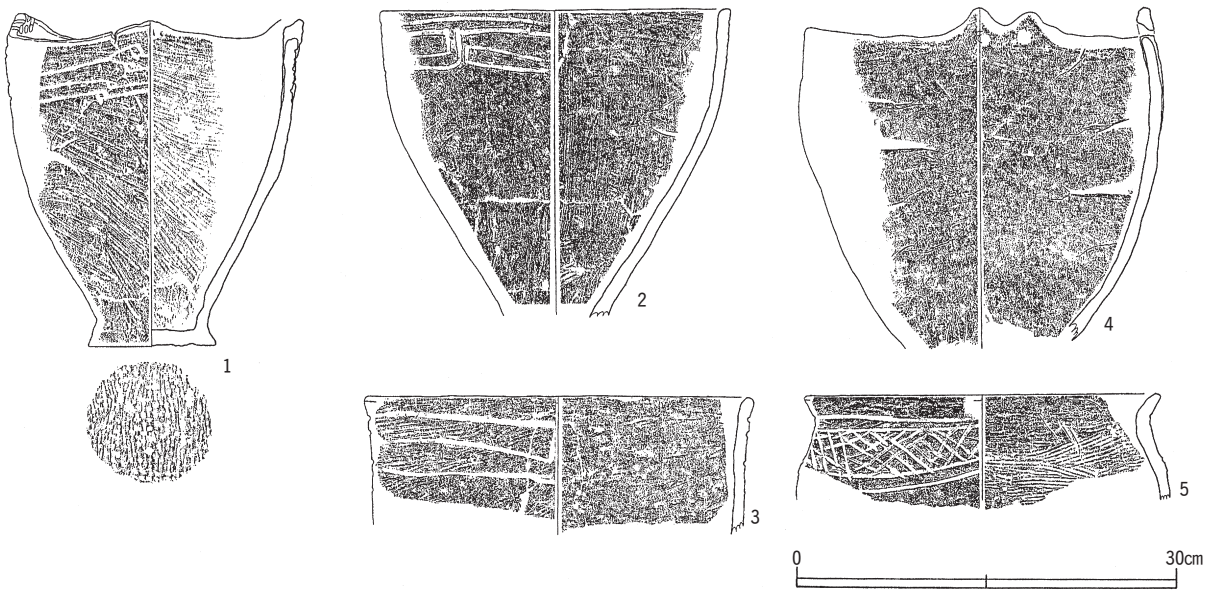
資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

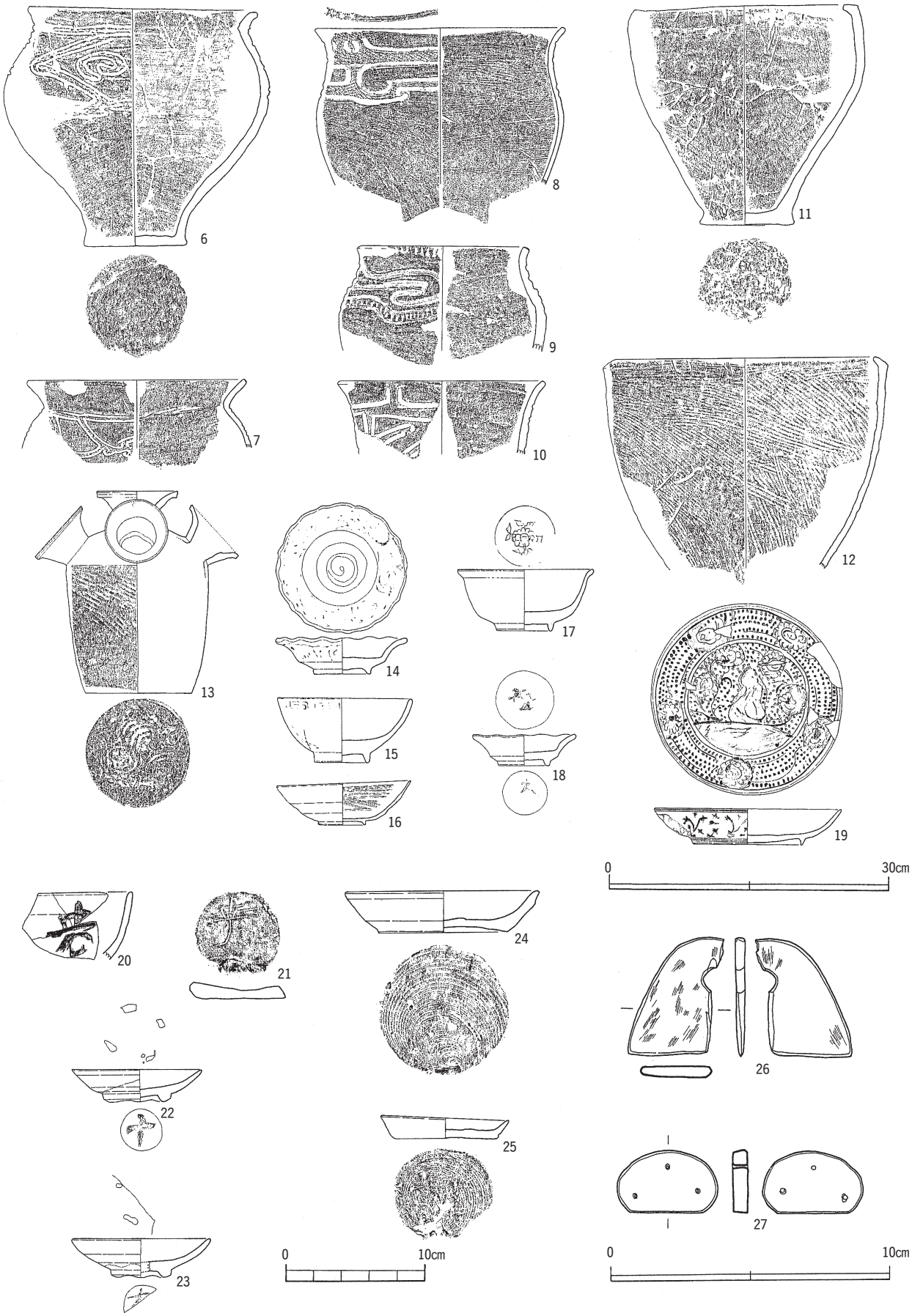
参考文献

中村和美・栗林文夫「持躰松遺跡（２次調査以降）芝原遺跡･渡畑遺跡について」『古代文化55-2』2003

（栗林文夫）



第２図　出土遺物


6
8
11
9
7
10
12
13
14
17
15
18
16
19
0
30cm
20
21
24
22
26
25
23
27
0
10cm
0
10cm

第 3 図　出土遺物